

細田あや子著

『よきサマリア人』の譬え

—— 画像解釈からみるイエスの言葉 ——

三元社 二〇一〇年三月三十一日刊
A5判 四五二九一頁 六四〇〇円＋税

土井健司

「よきサマリア人」の譬えは、キリスト教はもちろん、キリスト教を超えて広く知られたイエスの譬え話である。一般に隣人愛を説くものと解釈され、解釈史は古代から連綿とつづき、決して途切れることがない。そのため、さまざまな時代のキリスト教思想の源泉のひとつとなっている。細田あや子氏の労作は、この譬え話の画像を取り上げ、その解釈を通して譬え話の解釈史を鳥瞰する総合的な研究となっている。

まずは目次を確認しておきたい。

第一章 福音書における譬えの位置と画像化された譬え

- 一・一 福音書におけるイエスの譬えの位置
- 一・二 キリスト教美術におけるイエスの譬えの画像の位置
- 一・三 イエスの譬え画像概観
- 一・四 小括

第二章 「よきサマリア人」の譬えとその釈義テキスト

- 二・一 「よきサマリア人」の譬えのテキスト

二・二 「よきサマリア人」の譬えの釈義テキスト

二・三 小括

第三章 西ヨーロッパおよびビザンティンにおける「よきサマリア人」の譬えの画像化

- 三・一 視覚化されたモチーフ
- 三・二 表現方法
- 三・三 物語構造と表現形態
- 三・四 画像学的伝承と編集
- 三・五 補論 ビザンティン問題

第四章 「よきサマリア人」の譬え画像の意味と解釈

- 四・一 寓意のおよび予型的画像化
- 四・二 終末論的コンテキストにおける譬えの画像
- 四・三 救済史的観点に基づいて描かれたビザンティン美術の譬え画像

第五章 「よきサマリア人」の譬え画像における送り手と受け手の呼応作用

- 五・一 譬え画像の多義的構造
- 五・二 譬え画像が同時代の受け手に及ぼす作用

第六章 譬えの語りおよび譬えの画像によるコミュニケーション

- 六・一 イエスの譬えと譬え論
- 六・二 譬え画像の特質
- 六・三 中世の情報スタイルとキリスト教美術

結び

以上、一覽しただけでもこの研究の総合的性格を窺うことができよう。研究というものには研究の全体を鳥瞰するマクロの視点と細部の厳密さを追及するミクロの視点が必要となるが、両者の均等なバランスというより、どうやら研究によっていづれかに偏る傾向が見られる。ミクロの視点を重視するならば、テクストについて詳細に分析を施して緻密な考証を重ねていく研究になるし、マクロの視点を重視するならば多くのテクストを包括する全体像、全体を統べるアイデアを重視した研究が展開されることになる。とはいえないが一方のみでは学問にはならない。マクロだけでは単なるアイデアにすぎないし、ミクロだけでは研究の価値や意味が蔑ろにされてしまうからである。その意味でもちろん両面が必要である。このように考えるならば、本書は、マクロな研究を展開した部類に入れられるであろう。古代から中世、ポスト・ビザンツ時代にいたるまでに描かれた、東西それぞれの教会における「よきサマリア人」の譬えの図像をできるかぎり収集し、鳥瞰した研究だからである。図像といっても壁画のような大きなものもあれば、写本の挿絵のような小さなものも含めて一切がここでは取り上げられている。書評執筆のために読み直したのだが、あらためてこれほど多くの図像を取り上げて調査・研究した著者の総合的な力量に脱帽した。評者は決して美術史を専門とするものではない。しかし譬え研究という点では少しは勉強したことがあるし、細田氏の研究の基礎文献の一つ、モンセレフスキーによる譬えの解釈史を扱った研究書などは読んだことがある。そうした聖書解釈、キリスト教思想史の立場からすると、まず図像表現におい

てこれほど豊かな譬え解釈が存在したということに驚く。

図像をもとにした解釈史を扱う研究論文の部分が前半であり、後半は作品例カタログとなっている。全体が五〇〇頁に迫る大作である。作品例カタログの部分は写本挿絵、壁画、ステンドグラス、浮き彫り彫刻、典礼用工芸品、その他の順に西方教会、東方教会を区別して取り上げ論じられていく。注や参考文献の付いた各作品に関する分析となる。後半だけでも一書としてよいだろう。

さて総合的な研究が展開されている前半部分について、以下各章の内容を確認しておく。

第一章は、まず福音書における譬え話の性格を現代の聖書学の成果をもとに論じ、つづく節では一転キリスト教美術における譬えの図像の意味を確定していく。その際重要な指摘と評者が考えるのは、聖書の図像が聖書テキストの言語と密接につながっている、「言語から図像へ」という方向と「図像から言語へ」という双方向の動きであろう。図像の製作者などは聖書テキストを知っていて図像化するわけであって、また観者は図像からテキストに帰っていく。一般に聖書の図像というものが写本の欄外に描かれた注釈から発した注釈的画像 (image commentaire) の面をもつとすれば、図像に見られる注釈をとおしてテクストを読むことになる。純粹に絵画として、美的鑑賞を目的とするのではなく、テクストや思想と関連しているのが譬えの図像というものだという。このため図像解釈のため著者はまず聖書における「よきサマリア人」の譬え話の釈義的考察を次の第二章で展開することになる。そして本章第三節では、

石棺や聖堂、写本、譬えの図像が概観され、しばしばイエスの譬えの図像が救済史的で予型論的意味を強調し、二項対立の構成を好む傾向があることが指摘される。

第二章は、福音書の「よきサマリア人」の譬え話の解釈と解釈史を考察している。譬え話そのものの考察は丁寧になされている。また解釈史ではアレキサンドリアのクレメンスから始めて、ギリシア教父の解釈、西方教会のアウグスティヌスの解釈、そしてペトルス・ロンバルドゥス、トマス・アクィナスなど中世ヨーロッパにおける解釈が概観される。その結果、サマリア人を隣人愛の模範とする字義的解釈と救済史的、キリスト論的解釈となる寓意的解釈の二つが認められるという。これらの諸解釈の影響がどのように図像に現れてくるのか、これは第四章の問題となる。

第三章では、いよいよ「よきサマリア人」の譬え話の図像が考察の対象となるが、まだ神学や思想には踏み込まず、それぞれの図像におけるモチーフ、表現方法など美術的観点からの考察が展開されている。オットー・ザリエル朝の写本四点の図像を具体例として考察するところからはじめて、「ある人」が徒歩で出発するのか、家畜に乗って出発するのかの相違など図像化における特徴を挙げる。譬え話について描かれる場面の取舍選択や内容変更などは、この譬え話の最古の作例である六世紀の『ロッサーノ福音書』に認められるという。注文主、図像製作者によるものと推定されるが、総合してどのような場面が取り上げられているのか、またどのような内容変更がなされているのかは一〇五頁に一覧表が掲載されている。加えて図像学

的伝承にも触れられ、とくにビザンチン美術と西方キリスト教美術の影響関係については補遺を設けて議論が続けられる。

第四章では、譬え話という言語テキストとその画像テキストという異なるメディア間から生ずる差異に着目し、作例に即して解釈を考察する。まず予型論的あるいは救済史的図像化が見られる『ロッサーノ福音書』、十二世紀後半の『ハインリヒ獅子公の福音書』、十三世紀から十五世紀にかけて製作された『ビーブル・モラリゼ』、シャルトルなどのステンドグラスの作例が取り上げられる。これらの作例ではこの譬え話がキリスト論あるいは救済史的に捉えられ描かれているという。また『ハインリヒ獅子公の福音書』では強盗に襲われた人がハインリヒエルデンとサンタンジエロ・イン・フォルミスの聖堂壁画など終末論的コンテクストに組み込まれた作例が取り上げられる。さらに以上の西方教会の作例につづき、『セルビア詩編』やアギオス・ニコラオス・トン・フィランソロピノン修道院の壁画など東方教会の作例が取り上げられる。強盗＝悪魔、サマリア人＝キリスト、祭司やレビ人＝モーセ、洗礼者ヨハネなどの寓意的図像はひろくギリシア教父の聖書解釈、思想にさかのぼる。著者はここでこうした作例について、東西を問わず、救済史的図像モデルの存在を指摘する(一九四頁)。つづいて典礼と結びついた作例などが論じられている。

第五章は具体的な作例検討を通して得られた成果をもとに図像の「送り手」と「受け手」に焦点を当てる。まず第一節の「譬え図像の多義的構造」では、さまざまな図像において確認

できる「語るイエス」と「語られた譬え」の区別あるいは一方のみの作例、またサマリア人Ⅱ被差別者という譬えが語られたイエスの時代の問題が変化して、サマリア人Ⅱキリストというキリスト論的省察になること、強盗に襲われた人をどのような者として描くのか、個人なのか人類なのかなどが論じられている。つづく第二節では「受け手」の問題がさまざまな作例のジャンルに応じて論じられる。図像が読み書きのできない人(literati)の教化を目的とする面もあるが、それだけでなく、豪華な写本などは一定の知識を有する裕福な信徒のため、また典礼書は聖職者のためのものであり、そうした図像の観者の立場がさまざまに論じられる。

最後の第六章を見ると、あらためて著者が聖書学者であることが確認できる。マルコ福音書とマタイ福音書を扱った聖書テクストにおける譬え話の概論からはじめ、聖書テクストの多層性を指摘して、古代・中世の神学者の解釈を再度確認する。とりわけ霊的解釈が論じられ、隠喩や奥義、謎論が取り上げられる。第二節ではこれまでの考察をもとにして譬え図像の特質が論じられる。隠れた意味を探るよう促すこと、馴染み深いものから未知のものへと人間精神を高めること、あるいは「信仰のさらなる深い意味、霊的意味へと導くような手がかりを提示しようとする」ことなどが挙げられる。第三節では中世の情報スタイルとして安定的な「畳長性」が挙げられ、加えて「声の文化」との関連で譬え図像の意味が解説される。すなわち「美術というメディアそのものが有する隠喩としての機能に着目するなら、それは表象イメージによって、この世の次元におさま

りえないもの、絶対者、超越者(神)を抽出、あるいは類推させようとする試み」(二七四頁)ということになる。

「むすび」ではこれまでの考察がまとめられる。聖書のテクストからの逸脱をも含め、聖書テクストならびに描かれた時代背景、図像学的伝承、「送り手」と「受け手」などの関係の中で「図像そのものが解釈史的受容の一産物である」と確認される。

以上、各章の内容について評者が読み取ったところからまとめてみた。こうして前半部分の研究を讀んでいくと、本書は美術史の文献というよりも、聖書解釈、それも影響史を譬え図像において論じた研究であることが分かる。あらためて著者の熱意と努力に敬意を表したい。とは言え評者は諸手を挙げて賛同するばかりではない。本書について、若干の批判的感想、疑問を記しておきたい。

東西のさまざまな時代の図像が取り上げられているために、さすがに全体の統一性がいささか不明瞭になっている印象がある。あまりに多くのことを盛り込みすぎたためとも思われるが、そのため具体的な図像それぞれの分析・論述には説得力があっても、全体として何か一つのテーゼが抽出されるものではなく、やや雑然とした印象がぬぐえない。関連して、そもそもひとつの研究の中で「よきサマリア人」の譬えの図像という点で共通したさまざまな図像について地域、時代の違いを超えて考察する以上、どのような視点からこれらをひとつの集合体として観ることができるのかを論じる必要がある。それは美術史研究というよりも、まさに「よきサマリア人」の譬え話とい

う枠組み、つまり聖書解釈史の枠組みであるように思うが、この研究の中で著者自身がその点をもっと明確にしておく必要があったのではないか。(ちなみに評者は本書を美術史研究として読み始めたが、途中から頭を切り替えて聖書解釈の研究書として読んだ。)

掲載されているいくつかの図像を見ると、たとえば強盗に襲われた人が中心と見える図像がある(例えば『ハインリヒ獅子公の福音書』の図像 II cat. 8)。伝統的にこの譬え話ではサマリア人が主人公となる字義的解釈あるいはキリスト論的解釈が展開してきたわけだが、図像表現の世界ではサマリア人ではなく、もとの譬え話の意図と合致して、強盗に襲われた人が中心になっているように見えるものが数点見出されるのである(著者自身一〇七頁や二三三頁ではこの襲われた人物を「筋の統治者」と呼ぶ)。これはサマリア人をキリストとする救済史的解釈を施した教父やスコラ学者の聖書解釈から逸脱しているように見える。ここから半死の人を中心とした恵みとしての神の国の譬えという現代的な解釈が、すでに中世ヨーロッパの図像のなかに存在する可能性を指摘することはできないのだろうか。

また図像をどのように観るのかについてはある程度開かれてはいるはずで、図像化することで解釈が定まるとは限らない。たしかに図像は何かを描くことで強調点を浮き彫りにする。しかしそれでも図像のどこに視点を定めるのかは観者に委ねられているわけであって、ある程度開かれたところがあるのではないか。図像というものが解釈を固定化する面を有する一方で、受け取り方についての自由の可能性について尋ねてみたいところ

である。

最後に私事になるが、見つけて喜んだのはパリ国立図書館所蔵のギリシア語写本五一〇番に関する記述であった(五四頁以下ならびに三四九頁以下)。評者自身すでに複製を入手しているのだが、その第一四九葉には上段にギリシア教父の大バシレイオスの病院が描かれている。病院史では最古の病院のひとつとされる施設になる。評者自身の研究のためすでにこの写本について六〇年代の美術史家ネルセシアン（Nersisyan）の論文などいくつかは読んでいるが、この第一四九葉が本書にも掲載されており(図11)、解説も加えられていた。ギリシア語写本五一〇番は比較的有名な写本だが、著者のコメントを参考にさせていただいたことを一言添えて、この拙い論評を閉じることにしたい。